



## 宇宙観5000年史 —人類は宇宙をどうみてきたか

中村 士・岡村定矩 著

東京大学出版会 308頁 3,200円+税

解説書  
お薦め度  
5  
☆☆☆☆☆

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」。ゴーギャンの作品名としても有名なこの句は、人間にとってもっとも根源的な問いの一つであろう。人類が築き上げてきた文化は、突き詰めれば、すべてこの問いに還元されると言っても、言いすぎではない。ゴーギャン自身は主に芸術を通じてこの問いと対峙したが、天文学もこの問いに直接的に迫る方法の一つであろう。宇宙における私たちの位置づけとはどのようなものであるのか。いつの時代にも共通する、宇宙観の中心的テーマである。

本書では、宇宙や天体についての科学的知識の集大成としての天文学に対し、私たち人間が宇宙をどのように認識しているかという宇宙観の変遷についてまとめられている。時代や地域ごとの天文学の発達史を背景にしなが、それに応じて宇宙観がどのように変化してきたのか、天文学者の視点から丁寧な解説が行われている。その範囲は、タイトルにもあるように5000年前の天文学発祥の時代から、ダークマターやダークエネルギーなど最先端の話題まで、幅広い。全部で16の章から構成されており、章ごとに読み進めることで段階を追って宇宙観が進歩してきたことが理

解できるようになっている。研究の現場に通じている天文学者ならではの視点も随所にちりばめられており、研究に携わる者であれば納得感をもって読めるだろう。具体的な人名や資料も豊富に挙げられており、イメージを作りながら読み進めることができる。これまでこのような分野に触れたことがなかった読者にも、お勧めだ。

いくつかの章では、大胆な試論も述べられている。第2章では「天文学の発祥と地球環境」として、地球環境の変化によって、必要に迫られて初期の天文学が誕生したという論が披露されている。また、附録Bでは、ETIに関する議論も行われている。いずれも物理学としての天文学の範疇ではないが、天文学という枠組みの懐の広さを感じられるもので、読んでいて面白い議論である。

本書には附録や参考図書と文献、図表出典一覧に索引もついており、この1冊があれば、天文学史に関する基本的な事柄はすべて押さえられるようになっている。一般向けに講演する機会がある研究者や教育者は、手元に置いておくことをお勧めしたい。

(高梨直紘, 東京大学EMP)